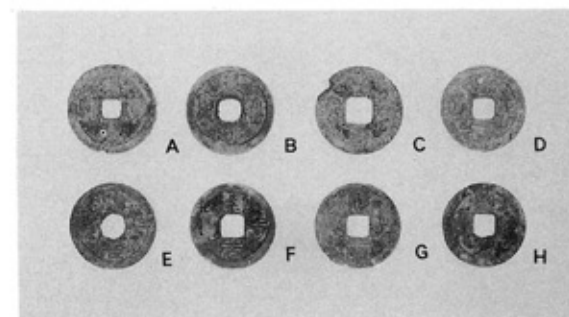
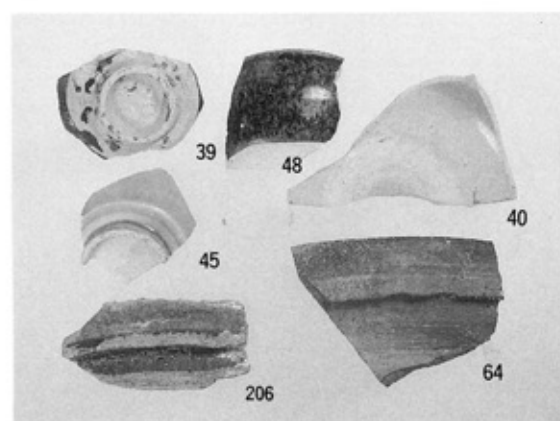
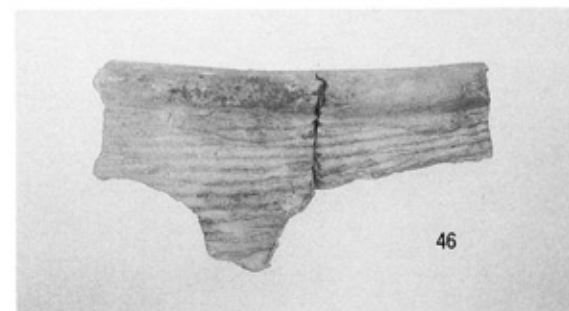
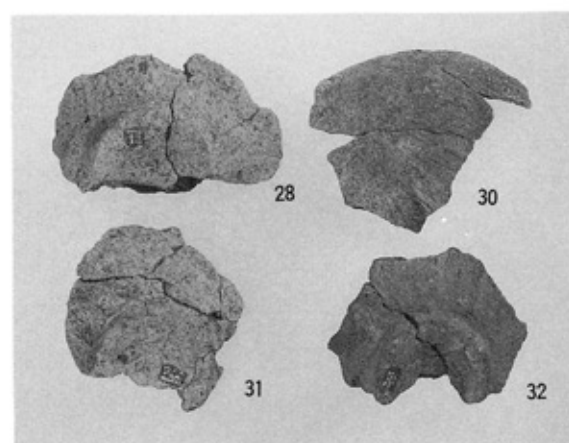
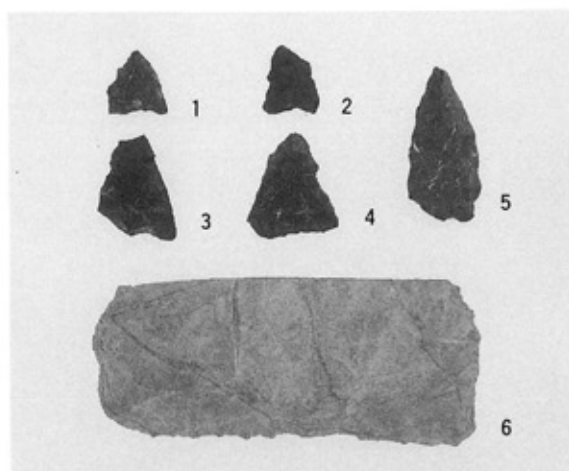


烏居遺跡発掘調査概報

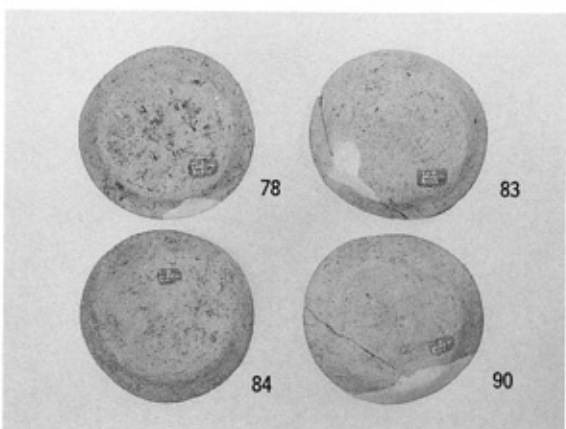
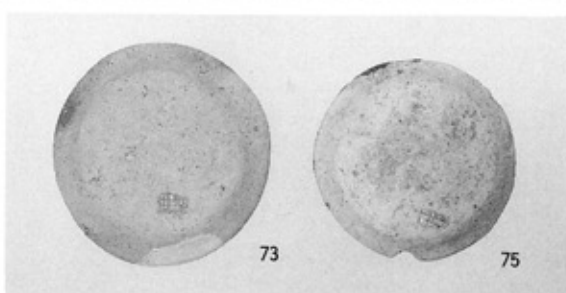
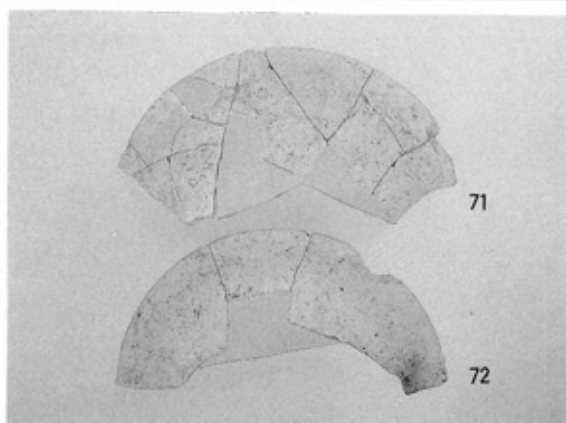
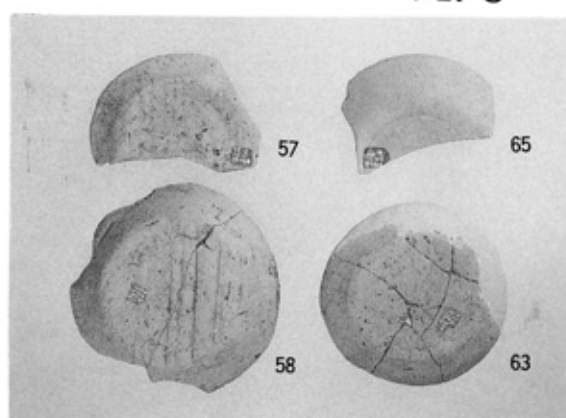
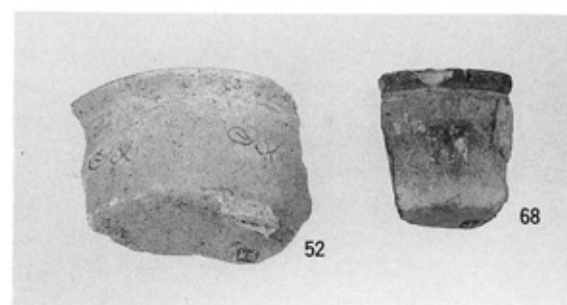
—JR紀勢本線海南駅連続立体交差事業に伴う発掘調査—

1991.3

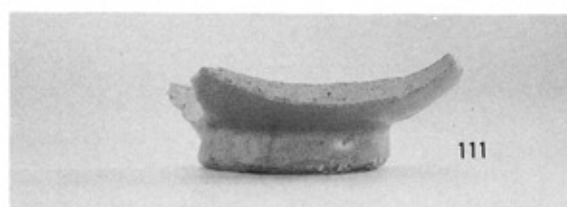
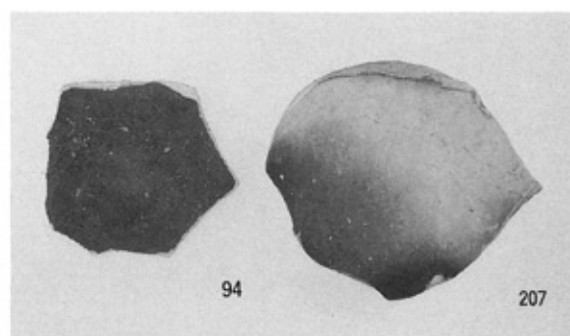
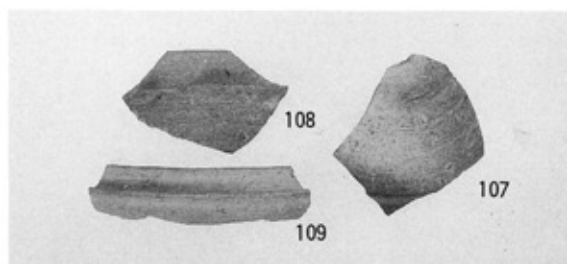
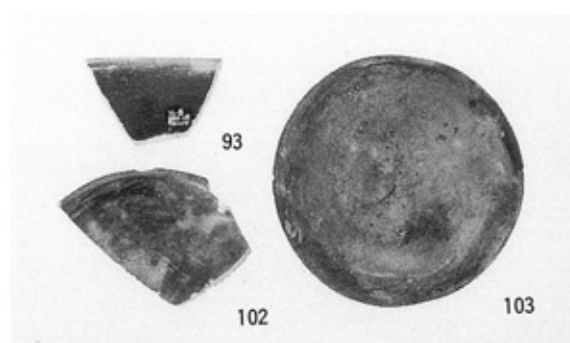
財団法人 和歌山県文化財センター



1-P2, 4-28-SK12, 32-SD2, 37~40-SD1, 49-SK5,
64-SK8, 206-SK16, A~H-SK15



52-SK5, 55~58-SK4(1), 63-SK4(2), 71~73·75·78·83·84·90-SK10





95



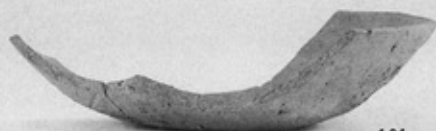
96



98



99



101



103

序

海南市鳥居に所在する鳥居遺跡は、多数の縄文時代の土器や石器が発見され、また、これまで県下では出土例の少ない土偶が見つかっています。

この遺跡は和歌山県における縄文時代後期の代表的な遺跡の一つですが、このたび、ＪＲ紀勢本線の高架建設工事に伴い、和歌山県の委託を受け発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代の遺物はもとより、鎌倉時代から江戸時代にかけての遺構・遺物を多数検出するなど新たな知見を得ることができました。

ここに調査の成果をとりまとめ、概要報告書を刊行する運びとなりましたが、本書が当地方の歴史を知るうえで、一つの資料となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査の実施にあたり数々の御協力、御支援を賜った関係各位並びに地元の皆様方に厚く感謝の意を表し、御礼申し上げます。

平成３年３月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 仮谷 志 良

例 言

1. 本書は、ＪＲ紀勢本線海南駅連続立体交差事業に伴う鳥居遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は和歌山県の委託を受け、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 調査は和歌山県教育委員会の指導を受け、調査委員羯磨正信・巽 三郎・都出比呂志・藤澤一夫各氏（和歌山県文化財保護審議会委員）の指導・助言を得た。
4. 調査に際しては、和歌山県土木部計画課、和歌山県海南鉄道高架建設事務所、西日本旅客鉄道株式会社和歌山支社和歌山保線区の御協力を得た。
5. 本書には、和歌山県教育庁文化財課が平成元年12月に実施した試掘調査時の出土遺物についても併せて収録している。
6. 本書で使用した遺構の記号は、土坑－ＳＫ、溝－ＳＤ、柱穴（ピット）－Ｐである。
遺構番号は、本概報作成に際し、新たに整理し付したものである。
7. 遺構実測図中の方位は全て磁北を表したものである。
8. 遺構及び遺物に付した番号等は、本文・実測図・写真図版の全てに一致する。
9. 調査及び本概報の編集・執筆は、財団法人和歌山県文化財センター技師 井石好裕が担当した。

目 次

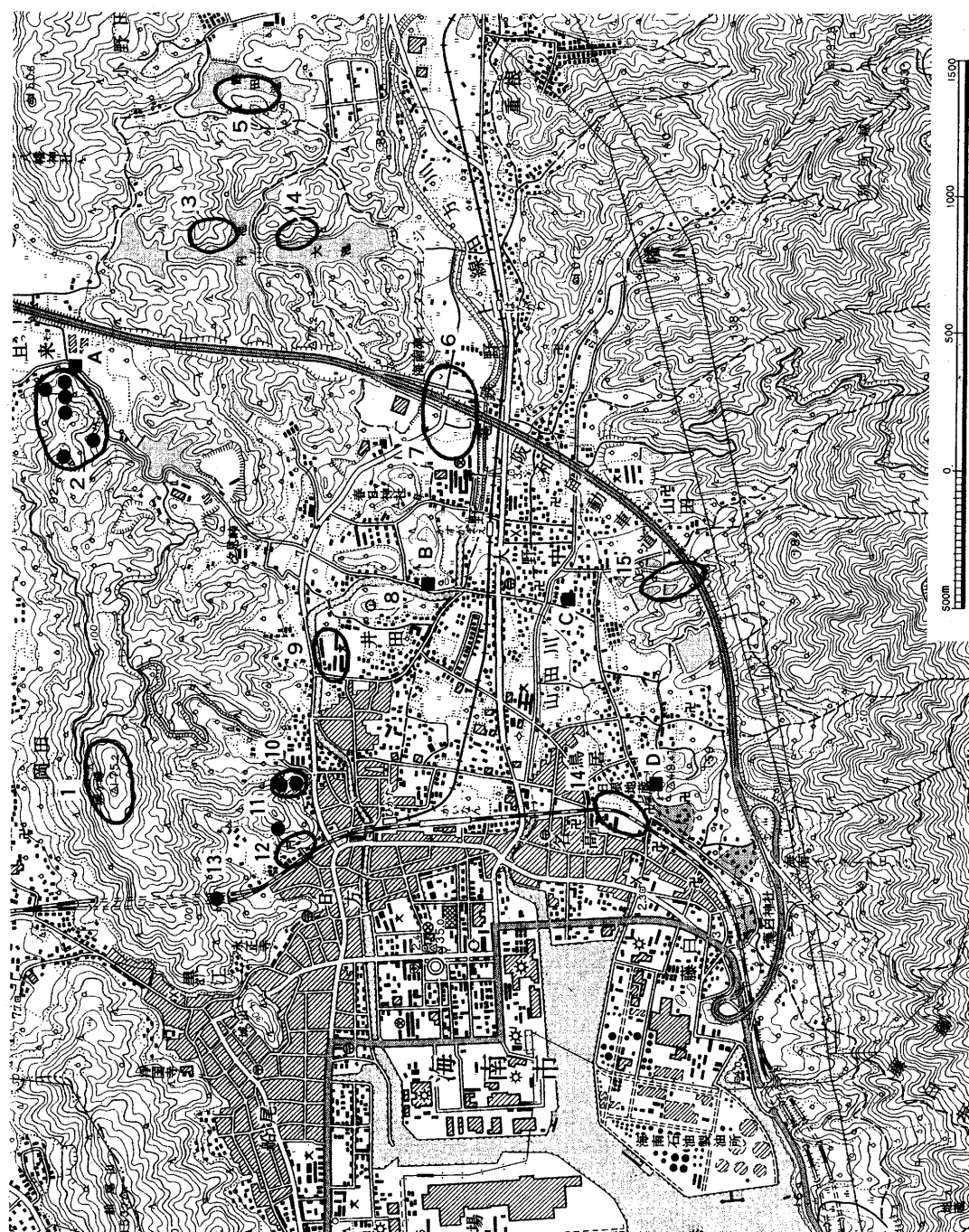
I. 位 置 と 環 境	-----	1
II. 調 査 の 位 置 と 概 要	-----	1
III. 遺 構	-----	2
A 区	-----	2
B 区	-----	5
C 区	-----	6
IV. 遺 物	-----	8
V. ま と め	-----	14

挿 図 目 次

第 1 図 鳥居遺跡と周辺の遺跡	-----	iv	第 9 図 S D 2 土層図	-----	6
第 2 図 遺跡位置図	-----	1	第10図 掘立柱建物実測図	-----	7
第 3 図 調 査 区	-----	1	第11図 遺物実測図	-----	8
第 4 図 各地区基本土層	-----	2	第12図 遺物実測図	-----	9
第 5 図 遺構平面図	-----	3~4	第13図 遺物実測図	-----	10
第 6 図 S D 1 土層図	-----	5	第14図 遺物実測図	-----	12
第 7 図 S K 12・13 土層図	-----	5	第15図 遺物実測図	-----	13
第 8 図 S K 10 遺物出土状況	-----	5	第16図 銭貨拓影図	-----	14

図 版 目 次

PL. 1 1) 遺跡遠景 (南から)	PL. 5 1) S D 2 (南から)
2) A区全景 (北から)	2) 同 南肩部
PL. 2 1) B区全景 (南から)	3) 同 中央部
2) B区中央部 (東から)	4) 掘立柱建物 (北から)
PL. 3 1) S D 1 土層	5) S K 21・22 (南から)
2) S K 10 (東から)	PL. 6 出土遺物 (1)
3) S K 10 遺物出土状況	PL. 7 出土遺物 (2)
4) S K 15~18 (西から)	PL. 8 出土遺物 (3)
5) S K 13 土層	PL. 9 出土遺物 (4)
PL. 4 1) C区全景 (南から)	PL. 10 出土遺物 (5)
2) 同 (北から)	



- 1 日方山城跡
- 2 且来下垣内古墳群
- 3 内池遺跡
- 4 赤坂大池遺跡
- 5 鏗田池遺跡
- 6 大野中遺跡
- 7 海南高校校庭遺跡
- 8 地藏寺山古墳
- 9 海南第2中学校校庭遺跡
- 10 坂東山古墳群
- 11 柿本神社古墳
- 12 奥の谷遺跡
- 13 奥の谷古墳
- 14 鳥居遺跡
- 15 細工谷遺跡
- A 松阪王子跡
- B 松代王子跡
- C 菩提房王子跡
- D 祓戸王子跡

第 1 図 海南遺跡と周辺の遺跡

I. 位置と環境 (第1・2図、PL. 1)

鳥居遺跡は海南市鳥居に所在し、これまで紀勢本線の鉄道敷設工事等に伴い多量の縄紋土器や石器をはじめとして、県下では出土例の少ない土偶が発見されるなど、和歌山県下における縄紋時代後期後葉を代表する遺跡として知られている。

遺跡は海南市の南方に広がる山脈から北へ派生する小尾根の先端裾部にあり、標高は7～9 m前後である。遺跡の周辺は現在宅地化が進んでいるが、かつては遺跡のすぐ近くにまで海岸線が入り込んでいたものと考えられる。その後、自然の堆積や宅地化・水田化に伴う人為的な埋め立て、各種土木工事等により現在の地形が形成されたものである。



第2図 遺跡位置図

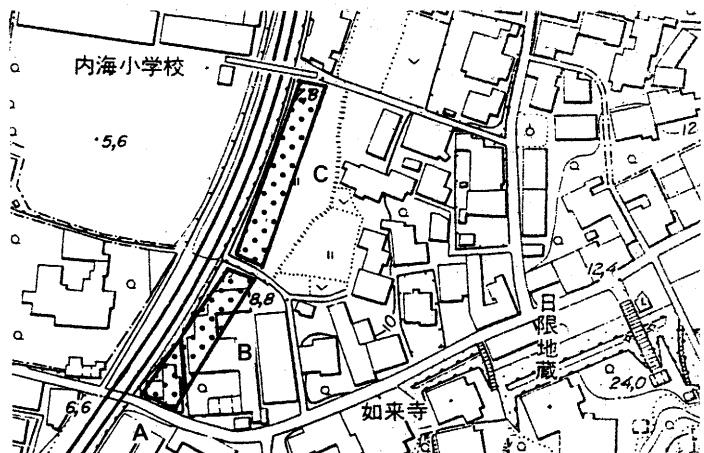
鳥居遺跡をはじめ周辺の遺跡は現在の市街地を取り囲むかのように点在している。縄紋時代の遺跡には内池遺跡・赤坂大池遺跡・鰐田池遺跡・細工谷遺跡などがある。いずれも土器・石器が採集されているのみで遺跡の時期については不明な点も多いが、早期から前期にかけての時期に属すると考えられる遺物も含まれている。また、約7 km東方の溝ノ口遺跡では後期初頭から晩期にかけての土器・石器が多量に出土し、後期の竪穴住居や配石遺構などが検出されている。弥生時代の遺跡には、中期を中心とする大野中遺跡・海南高校校庭遺跡や、後期の海南第2中学校校庭遺跡がある。大野中遺跡からは中期の竪穴住居、溝ノ口遺跡では前期の竪穴住居が確認されている。古墳(群)はいずれも後期と考えられるものである。奈良時代以降の遺跡で確実なものは少ないが、遺跡の東方には熊野古道が、JR紀勢本線の約100 m西を近世に開かれた新熊野街道が南北に通り、また、遺跡の北西には室町時代から戦国時代末期まで市場が開かれるなど、遺跡周辺は古代から人々の往来が盛んであったことが窺われる地域である。

II. 調査の位置と概要

(第3・4図)

今回の発掘調査は、紀勢本線の高架建設工事に伴い実施したものであり、線路に沿って東側に隣接した、長さ120 m、幅約10 m、面積約1,200 m²の範囲を対象に行った。

調査に際して、調査区を現有



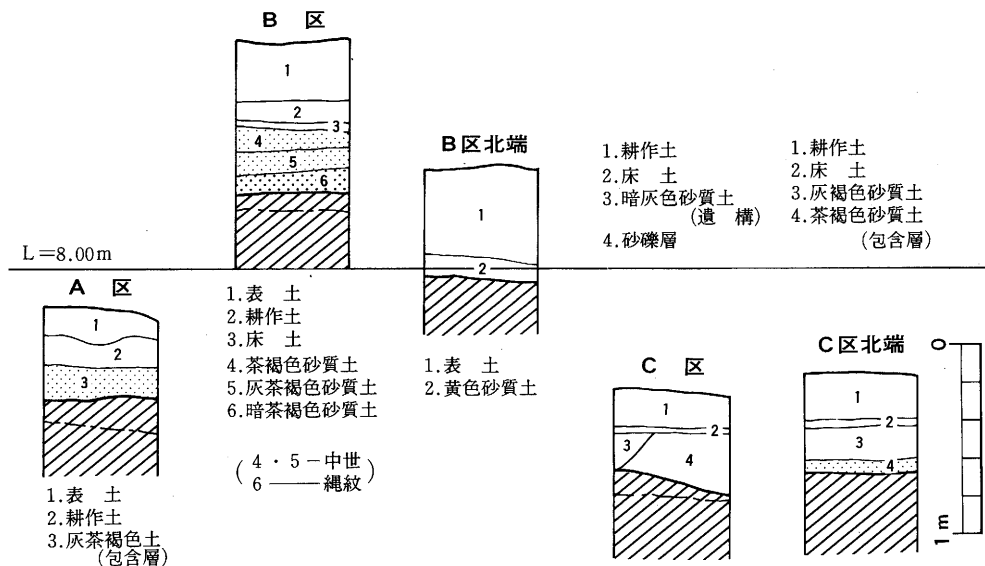
第3図 調査区

の道路等により3地区に分割し、南から順にA～C区と呼称した。

調査は、前年度に実施されている県文化財課の試掘結果に基づいて、縄紋時代の遺物包含層が確認されているB区についてはその上面まで、その他の地区は地山面まで機械による掘削を行い、その後遺構の検出作業を行った。各地区の基本層序は第3図に示したとおりである。中世の遺物包含層は全地区において堆積が認められ、B・C区の一部では包含層中に焼土・炭が含まれている。また、B区においては含まれる焼土の量等によりさらに2～3層に分層が可能である。縄紋時代の遺物包含層はB区にのみ堆積が認められる。

検出した主な遺構には、縄紋時代の土坑・ピット、中世の掘立柱建物・土坑・溝、近世の土坑・溝等がある。この内、縄紋時代の遺構が検出されたのはB区のみである。

現地調査は1991年1月25日まで実施し、その後、概報作成に伴う出土遺物整理等の作業を行い、1991年3月20日をもって事業を終了した。



第4図 各地区基本土層

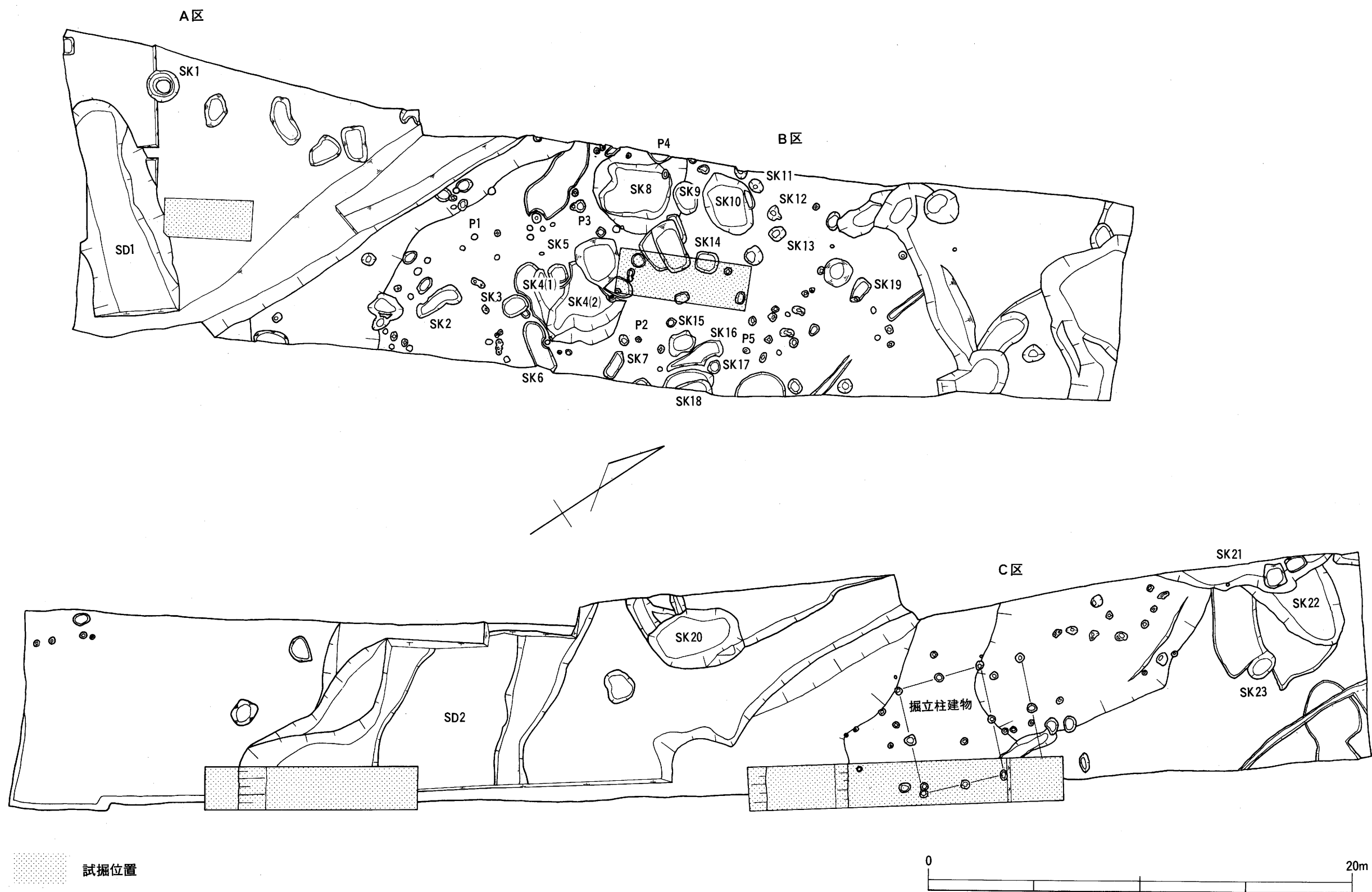
Ⅲ. 遺 構

A区 (第5・6図、P.L. 1・3)

当地区は遺構・遺物共に少なく、大幅な削平を受けているものと考えられる。検出した遺構は全て近世以降の時期のものである。

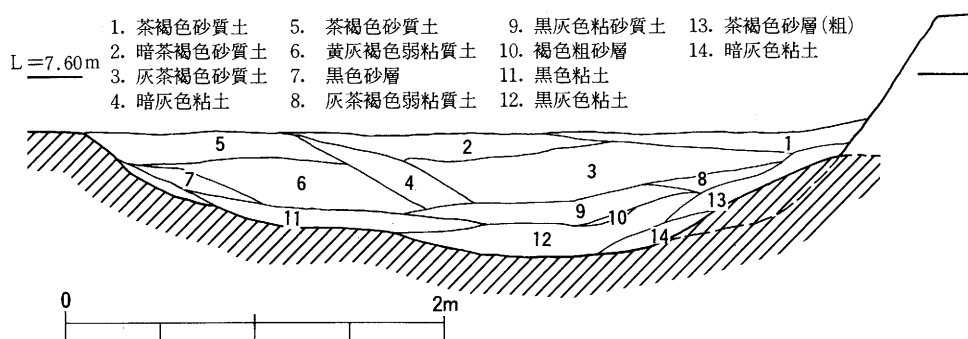
SK1 直径約1.5m前後の規模をもち、桶を埋設していたと考えられる円形の土坑である。

SD1 幅約4m、深さ0.6mを測る。調査区外に延びるため不明な点もあるが溝或いは池状の遺構と考えられる。埋土は上層が砂質土、中・下層は粘土と砂(礫)層とが互層となっている。



第 5 図 遺 構 平 面 図

出土遺物には唐津焼碗をはじめとする近世陶磁器、漆器碗などがある。



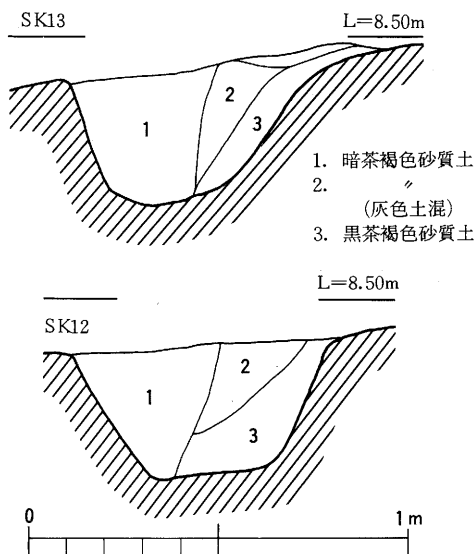
第 6 図 S D 1 土 層 図

B 区 (第 5・7・8 図、P L. 2・3)

縄紋時代及び中世の遺構が多数検出されている。縄紋時代の包含層は調査区西側ほど厚く堆積し、北東部には認められない。中世の遺物包含層は東壁側で 0.2 m、南西部分では約 0.7 m の厚さがあり、中央東側部分には特に多くの焼土が含まれている。

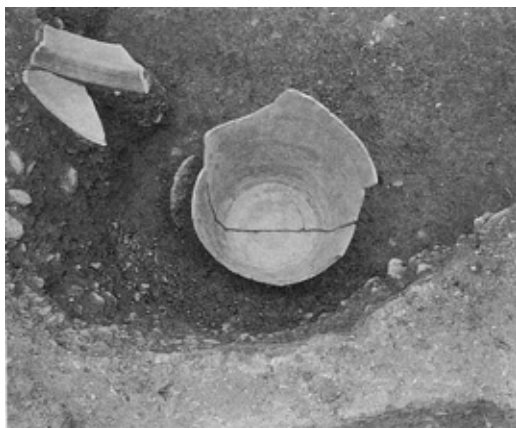
地山面は北東から南西方向にかけてゆるやかに下降する。B 区南端部と A 区には現地表面で約 1.3m、地山面で約 0.5m の比高差があり、水田化・宅地化の際に整地が行われ、石垣が築かれている。

S K 11・12・13 直径 1 m、深さ 0.6 m 前後の規模をもつ縄紋時代の土坑である。埋土は縄紋時代の遺物包含層である暗茶褐色系の砂質土。縄紋土器が比較的多く出土するが、細片が多い。大半が後期後葉に属すると思われる。



第 7 図 S K 12・13 土 層 図

S K 3 1.2m×0.9m、深さ 0.3m を測り、楕円形に近い平面形態をもつ。遺物は土師器・瓦器が少量出土している。



第 8 図 S K 10 遺物出土状況

S K 4 (1・2) 直径約4 m、深さ0.3 m前後を測る不整形な浅い大型の土坑。出土遺物には、土師器皿の他、少量の縄紋土器がある。

S K 5 円形を呈し、直径約1 m、深さ約0.3 mを測る。遺物には、白色系の土師器皿・土師質香炉・中国製染付皿・備前焼水屋甕などがある。

S K 6 楕円形を呈し、規模は長軸2.3m×短軸1.0m、深さ0.3 mを測る。土師器皿の他縄紋土器が少量出土する。

S K 7 1.4×0.5m、深さ0.3 mの規模をもつ。出土遺物には縄紋土器・サヌカイト片がある。

S K 8 4.6×3.8m、深さ0.2 mを測る浅い大型の土坑。平面形態は円形に近いが、底面ではややいびつな正方形を呈する。土師器・瓦器・陶磁器・瓦等が出土する。

S K 10 平面の形態は楕円形を呈し、東西3 m×南北2.3 m、深さ0.8 mを測る。埋土は礫を多く含む粒子の粗い(灰)茶褐色土である。埋土中から多量の土師器皿の他、備前焼大甕をはじめとする国産陶器や中国製青磁碗などが出土する。

S K 15 1.4×0.9mの規模をもち、北宋銭8枚が出土している。

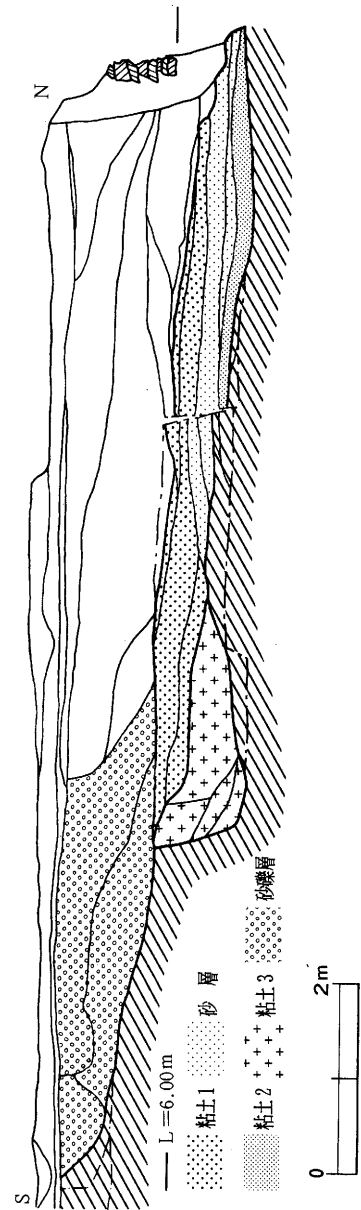
S K 16 長軸2.9m×短軸1.1m、深さ0.8mを測る楕円形の土坑。出土遺物には須恵器・土師器・瓦器・陶器がある。

その他、大小70前後の土坑・ピットを検出している。多くは縄紋時代の遺物包含層である暗茶褐色砂質土を埋土とし、縄紋土器やサヌカイト片が出土している。

C区 (第5・9・10図、P.L. 4・5)

遺構は全体的に希薄であり、特にSD2以南においてはわずかに土坑・柱穴数基を検出したのみである。

SD2 (谷状地形) C区全体の約半の面積を占め、南北幅約28mを測る。北側は緩やかな傾斜で立ち上がるが、南肩は2段に落ちこみ傾斜も急である。自然の地形と考えられるが、南肩部では人為的な掘削が行われている可能性もある。肩部では砂礫層、中央部では砂層・粘土層が堆積する。出土遺物には縄紋土器・須恵器・瓦器・土師器等がある。縄紋土器は主に南肩部最下層(第9図粘土3)から出土する。



第9図 SD2 土層図

S K 20 C区中央部で検出した1.7×1.2m、深さ0.8mの規模をもつ土坑。出土遺物には土師器・陶磁器・土錘がある。

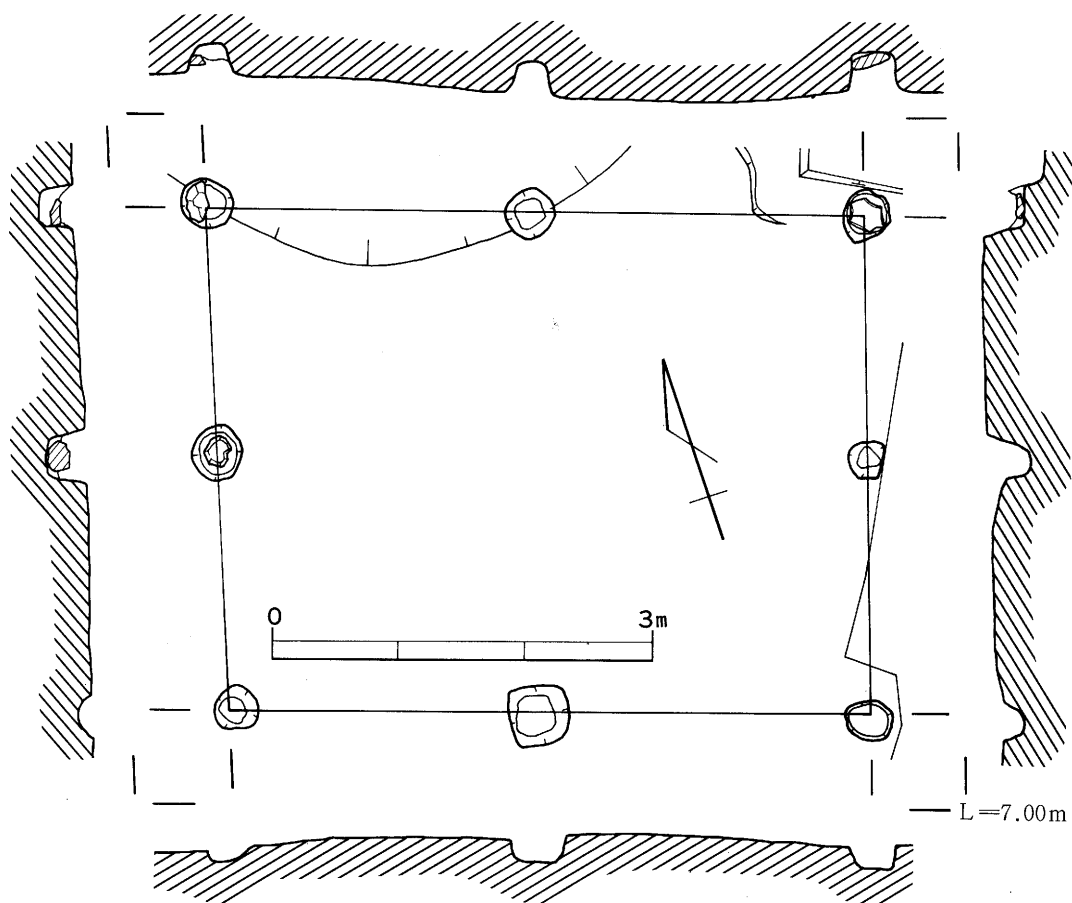
S K 21 調査区北西隅で検出した土坑。大半が調査区外へ延びるため規模は不明である。埋土には焼土が多く含まれている。遺物は土師器・瓦器・土錘等が出土している。

S K 22 最も深い部分で約0.2 mと浅く地山面の凹みとも考えられる。中世の遺物包含層である茶褐色砂質土を埋土とする。出土遺物は須恵器・土師器・瓦器があるがいずれも細片である。

掘立柱建物 東西2間×南北2間の規模をもち、柱間は東西で2.4～2.6m、南北で2.0～2.1mである。東西棟の建物と考えられ、桁方向はE-18°-Sである。柱穴は円形のものと同正方形のものがあり、掘形は30～50cmと小型である。一部掘形内に河原石を据え付けたものがあり、瓦器の細片が出土している。

その他、調査区北部で近世以降の水田耕作に伴うと考えられる溝・土坑を検出している。

以上、B・C区検出の遺構は、B区が縄紋時代及び16世紀後半代、C区が14世紀後半代を中心とする時期が考えられる。



第 10 図 掘 立 柱 建 物 実 測 図

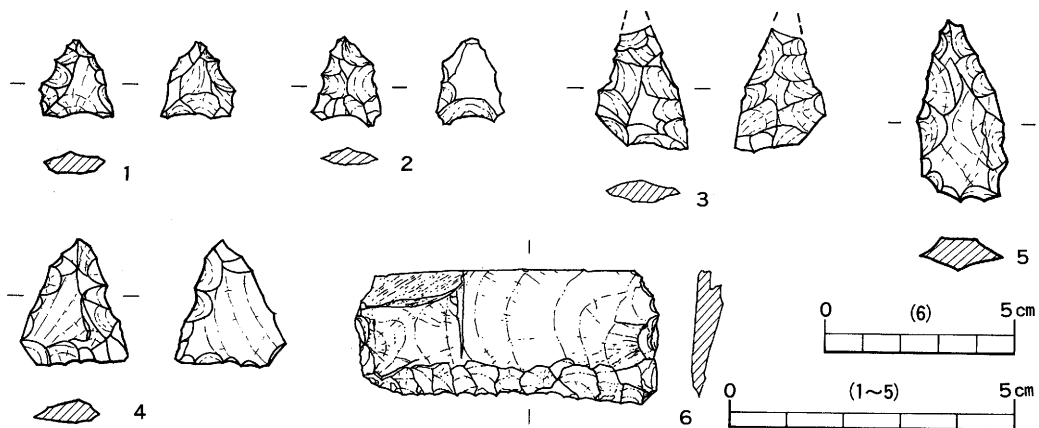
Ⅳ．遺 物 （第11～16図、P L・6～10）

出土遺物の時期は遺構と同様に、縄紋時代・中世・近世の3時期に大別できる。

以下、地区別に主な遺物について記述を行うが、石器・縄紋土器についてはこれとは別に一括して取り扱う。

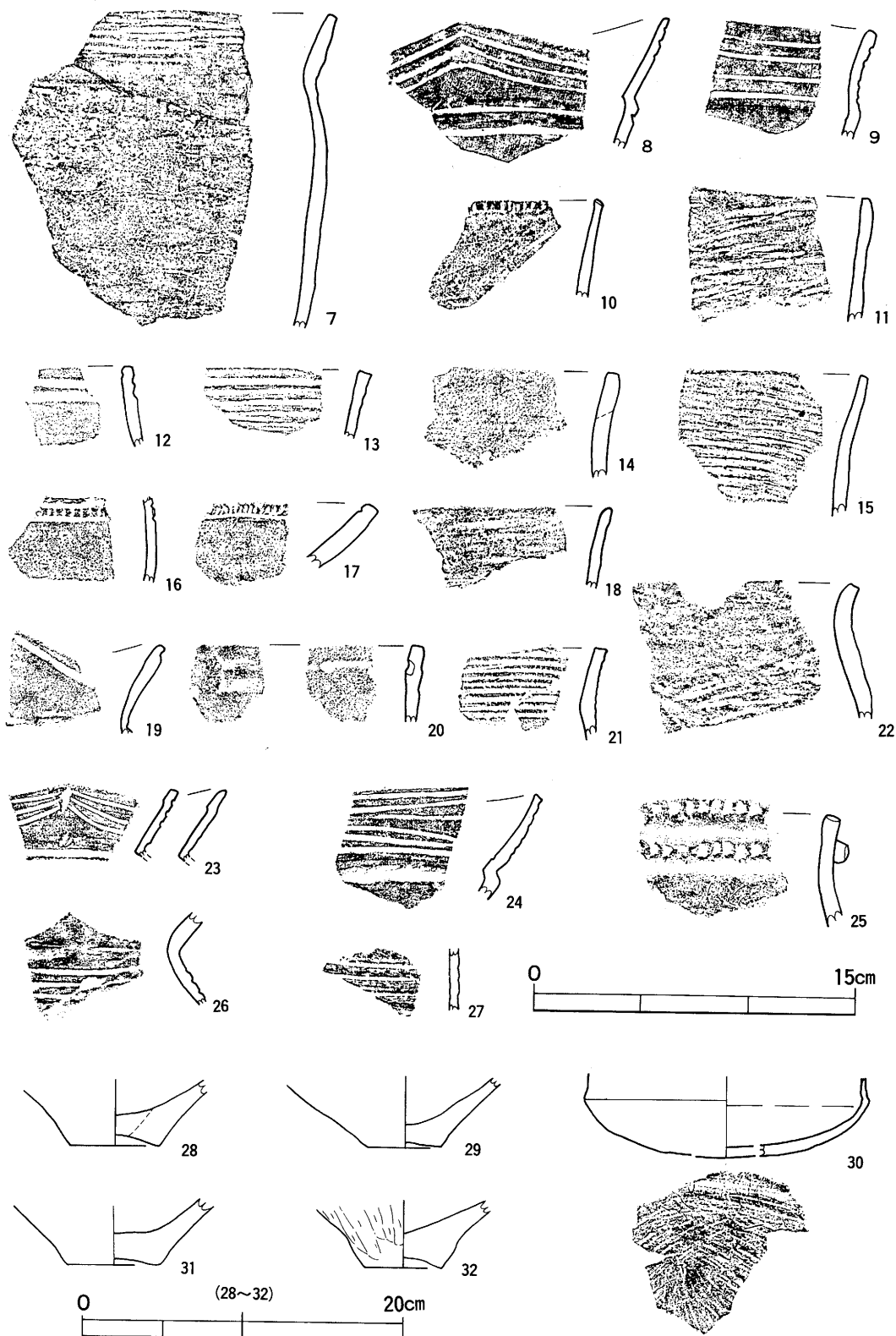
石器 量・器種ともに少なく、石鏃（1～5）・スクレイパー・石錘がある。1～3は凹基式、4は平基式、5は円基式の石鏃である。重量は1—0.46 g、2—0.44 g、3—1.29 g、4—1.34 g、5—2.62 gである（いずれも現存値）。2・4は片面に大剝離面が大きく残る。スクレイパー（6）は器長8.0 cm、器幅3.55 cm、刃部幅0.9 cm、重量29.27 gを測る。縦長の剝辺を素材とし、刃部は片面から作りだされており、ほぼ直線的である。両面に原礫面が残る。石錘は2点出土し、共に楕円形の礫の長軸側両端を打ち欠いたものである。石材は1～6がサヌカイト、石錘は結晶片岩である。

縄紋土器 8は波状口縁の浅鉢である。口縁に沿って平行に3本、肩部の屈曲部に2本の沈線が施される。外面黒茶褐色、内面は茶褐色を呈し、両面共に丁寧なミガキが行われている。9も8同様、波状口縁の浅鉢と考えられる。沈線紋は幅が2 mm前後あり、2本を1組の単位として施紋されている。肩部の屈曲は8ほど明瞭ではない。10は口縁端部にヘラ状工具による刻み目がある。器面調整は外面がケズリ、内面はナデである。12は外面に2本の凹線紋、内面に1本の沈線紋を巡らす。色調は淡茶灰色を呈し、内外面共ナデで平滑に仕上げられている。16は2本の沈線間にタテ方向の刻みを施す。17は口唇部内面に1本の沈線紋を巡らし、その上方にタテ方向の刻み目を入れる。19は波状口縁の深鉢である。口縁部及び屈曲部に各々1本の沈線を入れ、波頂部にはさらにタテ方向に1本の沈線を加える。茶褐色を呈し、胎土には角閃石が含まれる。20は外面に2本の凹線紋を巡らし、その上に粘土を貼付した後、巻具と思われる工具による圧痕を施す。



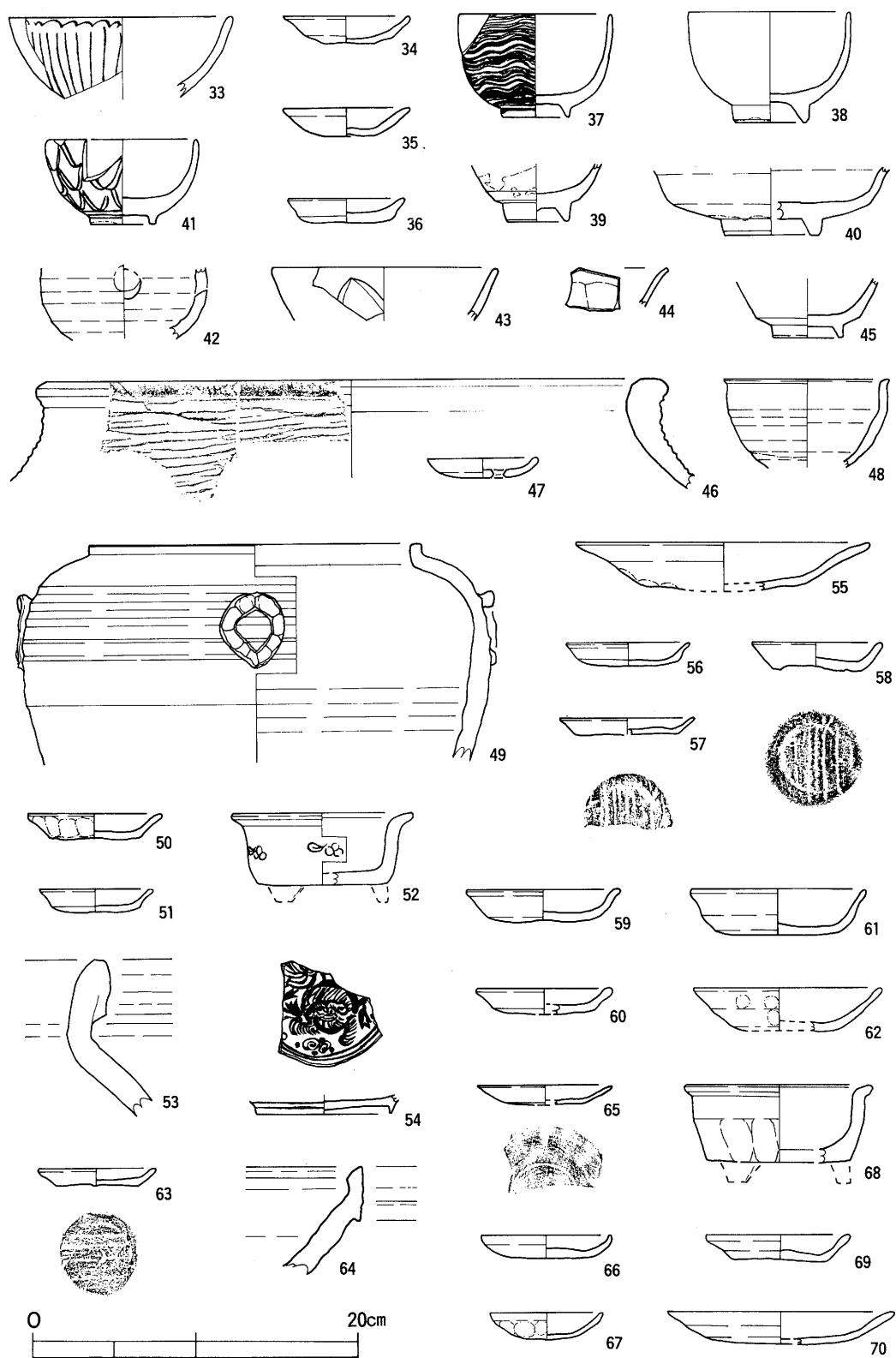
1-P2、4-SK12

第 11 図 遺 物 実 測 図



第 12 図 遺物実測図

7・8-SK13、9~12・28-SK12、13-SK19、14-SK3、15-SK11、16-P4、17-SK17、18-P1、
20-P3、22~27・32-SD2、29-SK4



第 13 图 遺物実測図

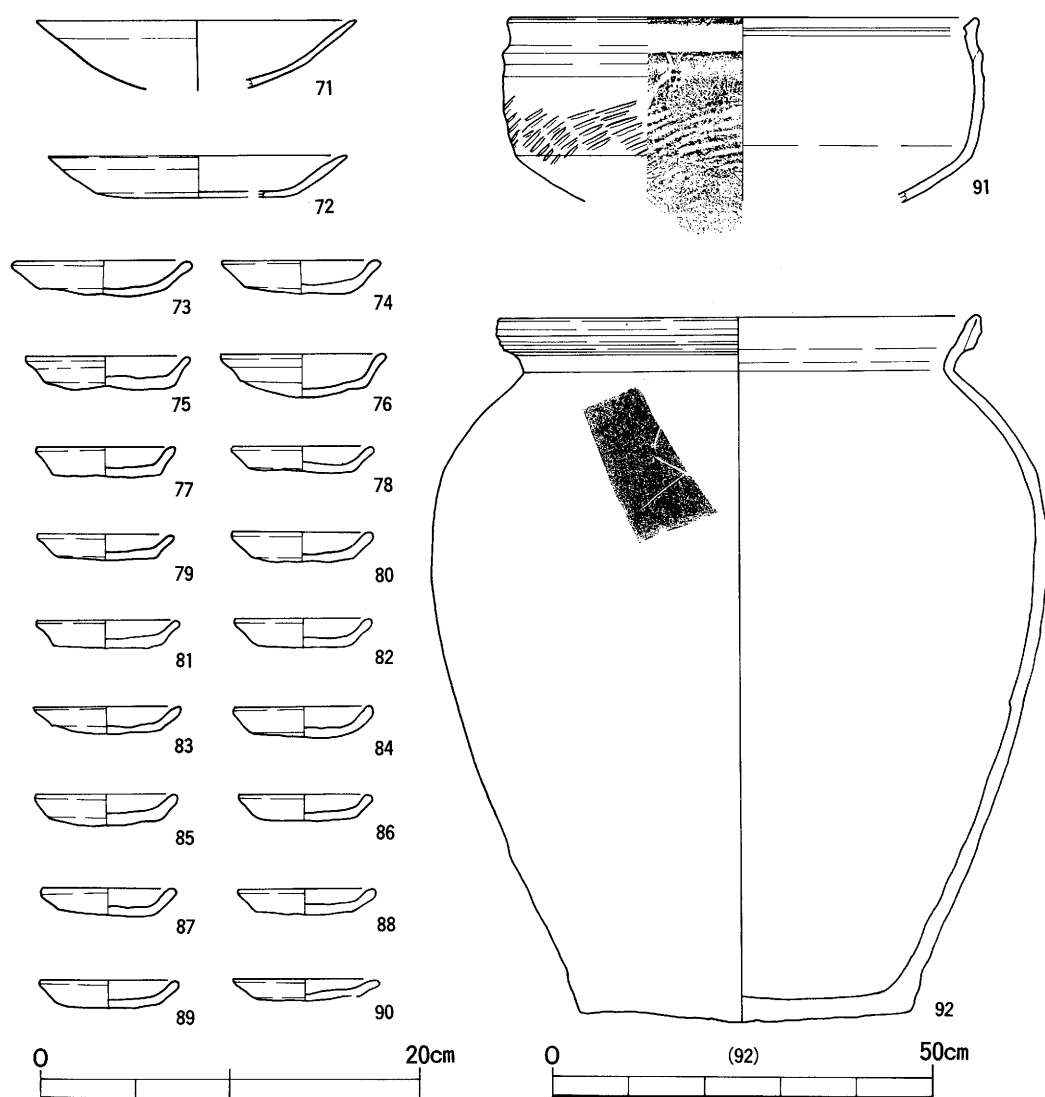
33~35-SK2、36~40-SD1、49~54-SK5、55~58-SK4(1)、59~63-SK4(2)、64-SK8

内面にも1本の凹線紋を施紋し、円形の刺突が1ヶ所認められる。23・24は波状口縁を呈する浅鉢である。口縁に沿って3本単位の沈線を施紋し、肩部は鋭く屈曲する。23には波頂部に圧痕が施される。25は貼付突帯をもつ深鉢の口縁部である。突帯及び口唇部には貝殻によると思われるD字の刻み目が施される。外面は暗灰色、内面は淡褐色を呈し、砂粒が多く含まれる。26・27は3～4本の凹線紋が施され、26は貝殻もしくはヘラ状工具による圧痕が認められる。その他、外面に巻貝あるいは二枚貝による条痕を施した無紋の深鉢がある。口縁端部を丸くおさめるものと、面取りを行っているものとがあり、後者の例が多い。深鉢の底部(28・29・31・32)は全て凹底であり、凹面は丁寧にナデ調整が行われている。胎土に砂粒を多く含み、28・31は黄灰色、29・32は赤褐色を呈する。30は浅鉢の底部である。砂粒を少量含み、全面に条痕が施される。

A区出土遺物 33はヘラ先による線描蓮弁紋を描く中国製青磁碗である。34～36は口径7.2～7.8cm、器高1.7cm前後を測る土師器皿。37・38は唐津焼碗である。37は刷毛目、38は無地のものである。39は黒褐色の釉を施した天目茶碗。40は肥前系の碗。見込み部の釉を蛇の目状にハギ取る。41は二重網目紋を描く伊万里焼染付碗である。

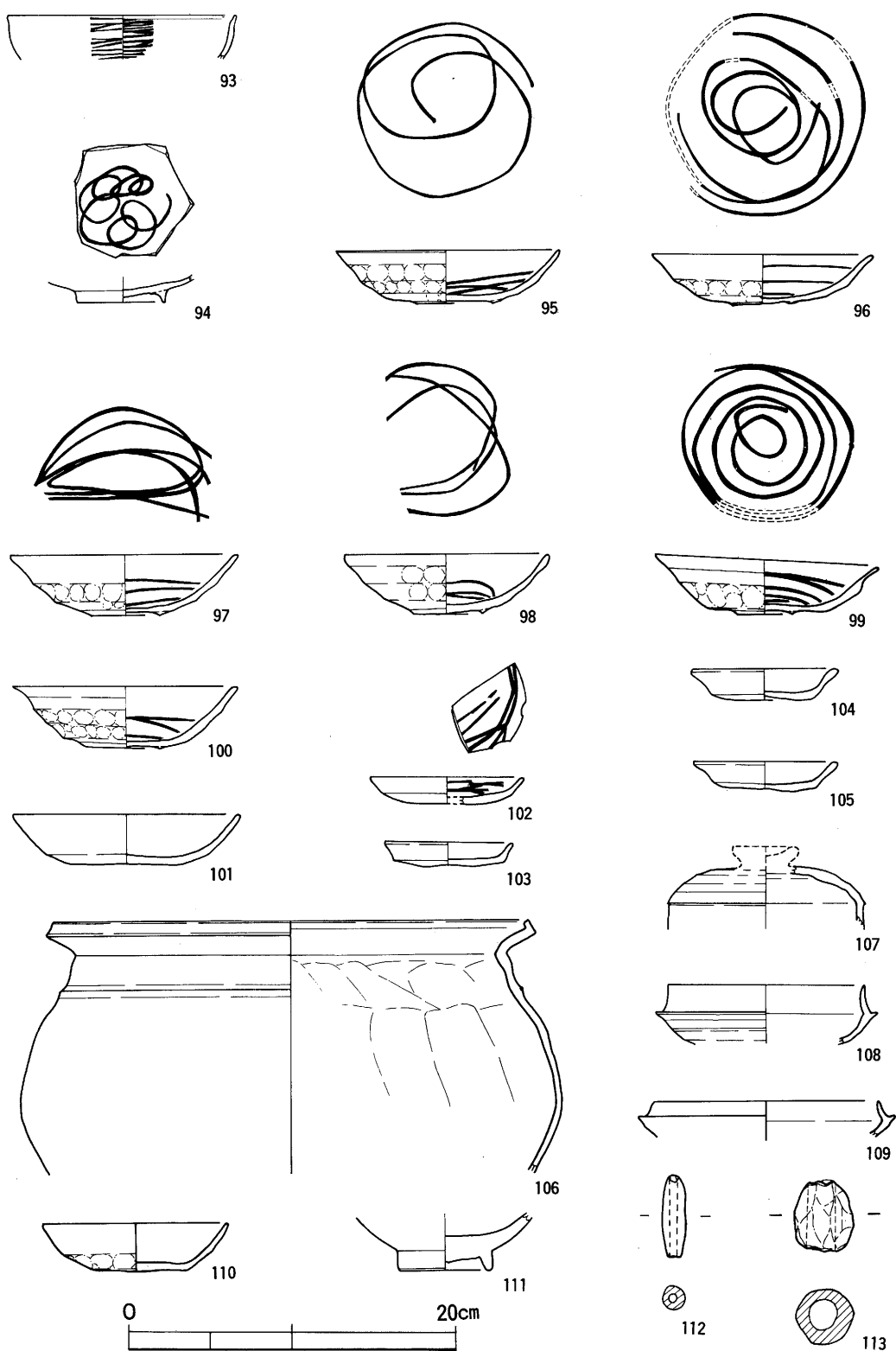
B区出土遺物 42は須恵器甕である。淡青灰色を呈し、内面には自然釉が認められる。青磁碗43は外面にヘラ彫りの蓮弁紋を描く。44は白磁角杯である。45は伊万里焼の碗。見込みに2条の圈線を施し、畳付けには砂が付着する。土師器甕46は外面は粗いタタキ、内面はハケによる調整を施し、口縁部はヨコナデを行う。土師器皿47の底部には内外両面から穿たれた直径6mmの円孔がある。48は黒褐色の釉がかかる美濃瀬戸系の天目茶碗である。以上42～48は石垣裏込め土出土遺物である。備前焼水屋甕49は、口径20.4cmを測り、口縁部は短く直立する。肩部には双耳が貼付される。暗茶褐色を呈し、外面及び内面の一部に淡黄緑色の自然釉がかかる。50は口径8.2cmの瓦器皿。51は白色系の土師器皿である。52は土師質の香炉。口縁部及び体部内面はヨコナデ、外面はタテ方向のヘラケズリを行う。体部中位に4～5ヶ所スタンプ紋を配す。53は備前焼甕。54は見込みに玉取獅子を描く染付皿である。55は口径18cm、器高2.9cmを測る土師器皿。胎土は精良で黄白色を呈する。56はよく水簸された精良な胎土をもつ白色系の土師器皿。57～63は赤褐色系の土師器皿。57～60・63口径7.9～9.4cm、61・62は10.7cmを測る。57・58・61・63の底部外面には板目圧痕が残る。64は備前焼の擂鉢である。206は常滑焼甕の口縁部である。暗緑色の自然釉がかかる。65～70はB区包含層出土遺物である。65は口径8.3cmの土師器皿で、底部は糸切りである。土師器皿66・69は口径8～9cmの赤褐色系の皿。67は丸みを帯びた器形の白色系土師器皿である。68は瓦質の香炉である。口縁部はヨコナデ、体部外面はタテ方向のヘラケズリ、内面は丁寧にナデが施されており、黒色炭化物が付着する。70は口径14cmを測り、黄白色を呈する。底部は平らで、口縁部は外に開き器高は低い。71～90はS K 10出土の土師器皿である。71・72は口径15.8～16.8cmを測り、淡黄色を呈し胎土も精良である。73～76は8.2～9.2cm、77～90は7cm

前後の口径をもち、いずれも口縁部には強いヨコナデが施こされ肥厚する。灰赤色～赤橙色を呈し、口縁部にススの付着するものがある。これらは根来寺坊院跡の調査において多量に出土している赤褐色系の皿に極めて似た形態・手法をもつものである。91は土師質の土鍋である。口縁部はヨコナデ、体部外面は右上がりの平行タタキ、底部付近ではヘラケズリを施し、内面は板状工具によるナデを行う。胎土は緻密で、淡黄赤色を呈し、スス等の付着は認められない。92は備前焼大甕である。口径62.8cm、器高93.4cm、胴部最大径81.2cm、底部径43.6cmを測る。口縁部は扁平な玉縁状を呈し、凹線が入る。胴部上半は丁寧に調整が行われているが、底部付近には粘土紐接合時の指頭痕や当て具痕が認められる。肩部には「□石入」の銘の一部と思われるヘラ描きがある。淡茶褐色を呈し、黄灰色の自然釉がかかる。A～HはSK15出土の北宋銭である。6種類8



SK10

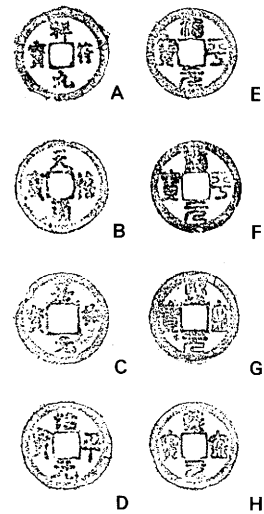
第 14 図 遺 物 実 測 図



第 15 図 遺物 実測 図

93~109-SD2、110-SK23、112-SK21、113-SK20

枚が出土している。A—祥符元宝（1008）、B—天禧通宝（1017）、
C—嘉祐元宝（1056）、D—治平元宝（1064 眞書）、E・F—治平元
宝（同 篆書）、G・H—熙寧元宝（1068）。



第16図 銭貨拓影図(1/2)

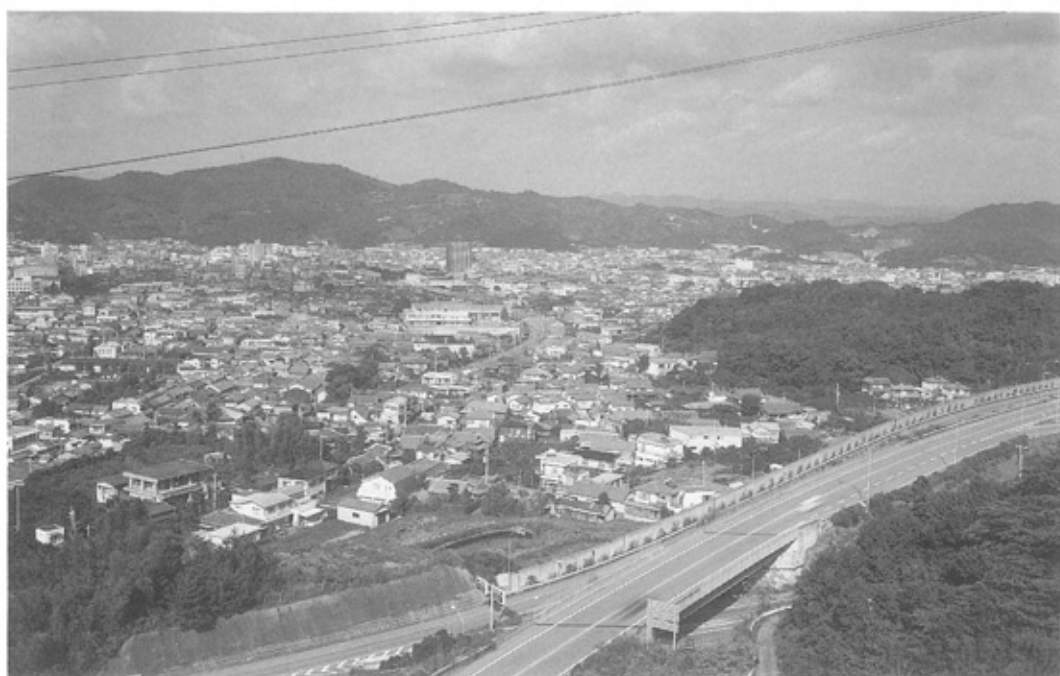
C区出土遺物 SD 2 出土の瓦器には椀・皿がある。93は内外両面
に幅1～1.5mmのミガキを施し、内面に沈線をもつ。口径14cmを測り、
胎土は精良である。椀底部94は見込みに連結輪状の暗紋を施し、高台
径は5.4cmを測る。95～100は口径12.4～14cm、器高3.1～3.8cmを測
る椀。外面に指押さえを1～2段残し、見込みには同心円状の暗紋を
施す。高台は粘土紐を貼付け軽くナデだけの形骸化したものであり、
径3.4～4.7cmを測る。底部が高台より突出するものもある。瓦器椀101
は高台のないタイプで、平底から体部が屈曲して外上方に伸びる。口
径14cm、器高3cmを測る。暗灰色を呈し、焼成は良好であるが、炭素

吸着は殆ど認められない。102・103は瓦器皿である。口縁部はヨコナデ、内面及び底部外面はナ
デを施す。口径は102が9.4cm、103は7.8cmである。102は口縁部から見込みにかけて幅2mmのミ
ガキを施す。104・105は土師器皿。106は土師器土釜で体部下半を欠損する。口縁部は外折し、
内上方に拡張する。体部上位に形骸化した突帯を付す。体部内面は板状工具によるナデ、外面は
ヘラケズリ後ナデを行う。口縁部内面から体部外面にかけてススが付着する。微砂粒を含み、黒
茶褐色を呈する。107～109は古墳時代の須恵器である。107は高杯の蓋、108・109は口径12cm前後
を測る杯身である。110は口径11.4cm、器高3cmの土師器皿。111は中国製青磁碗。釉はややにご
りのある淡灰緑色を呈し粗い貫入が入る。112・113は土師質の土鍾。重量は112—10.53g、113—
43.60gである。

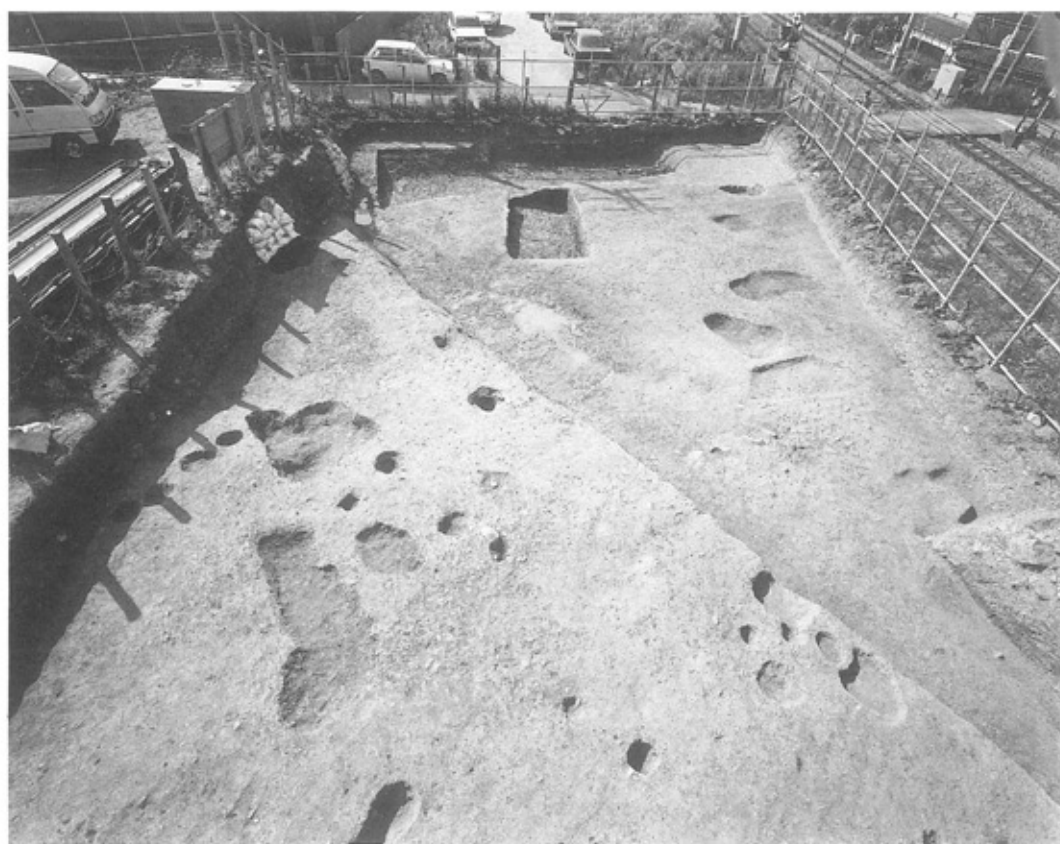
V. ま と め

今回の調査では、縄紋時代から近世にかけての遺構・遺物を検出した。また、少量ではあるが
古墳時代から平安時代の遺物を検出するなど、これまで知られていた遺跡の内容に新たな一面を
つけ加えることになった。縄紋土器は後期後葉（宮滝式）から晩期（滋賀里Ⅲ）の時期が考えら
れる。これは、これまでに発見されている遺物の時期と合致しているが、出土量は晩期のものが
多いこと、また、これまでに縄紋時代の遺物が多量に発見されている地点とさほど離れていない
にもかかわらず出土量が少ない点など、遺跡の範囲の問題も含め、今後に残された課題も多い。

- 参考文献 『紀伊風土記の丘年報 第4号』 和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所 1977
『海南市史 第3巻 史料編1』 海南市・市史編さん室 1979. 3
『和歌山県史 考古資料』 和歌山県 1982
『海南市史研究 第10号』 海南市・市史編さん室 1987
『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』 和歌山県教育委員会 1989. 3



1. 遺跡遠景（南から）



2. A区全景（北から）



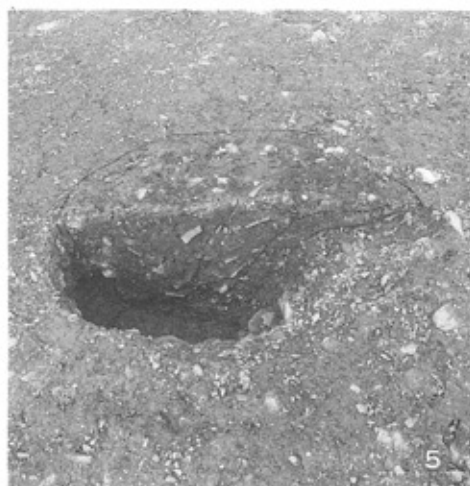
1. B区全景 (南から)



2. B区中央部 (東から)



1. SD1 土 層



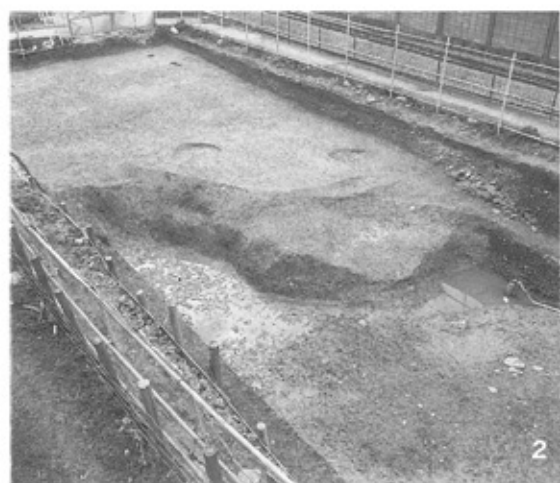
2. SK10 (東から) 3. SK10 遺物出土状況 4. SK15 ~18 (西から) 5. SK13 土 層



1. C区全景 (南から)



2. 同 (北から)



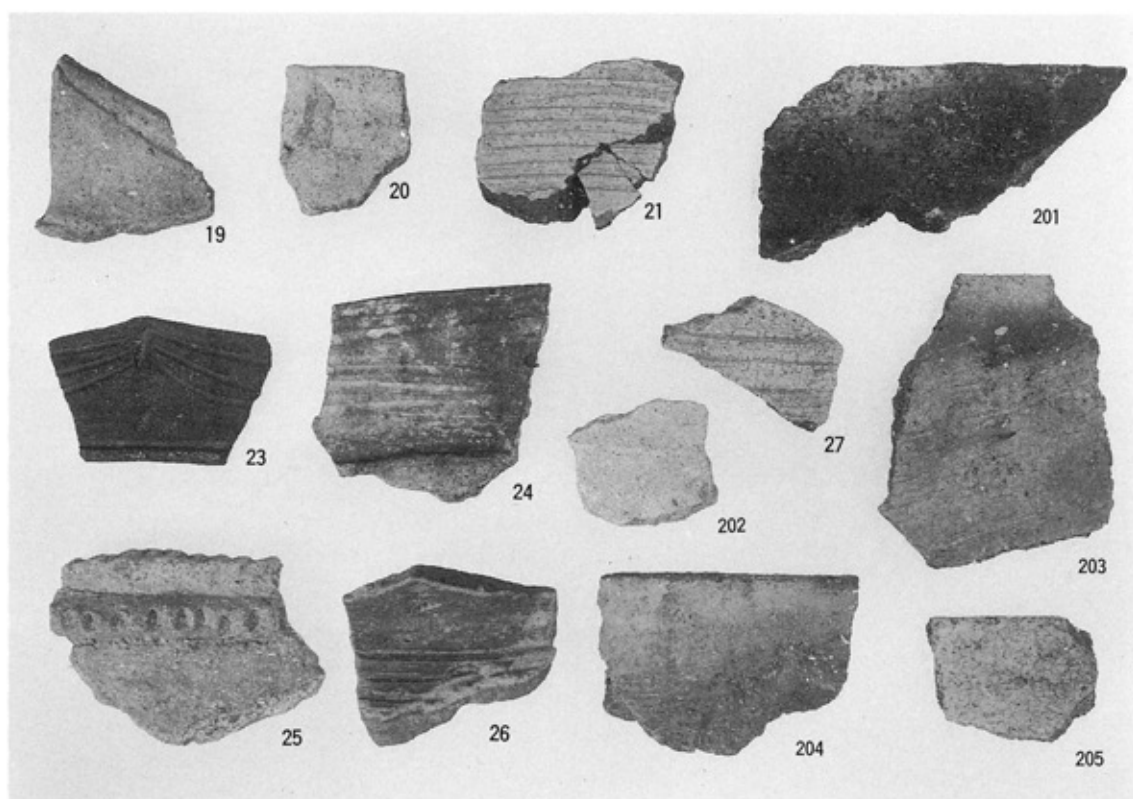
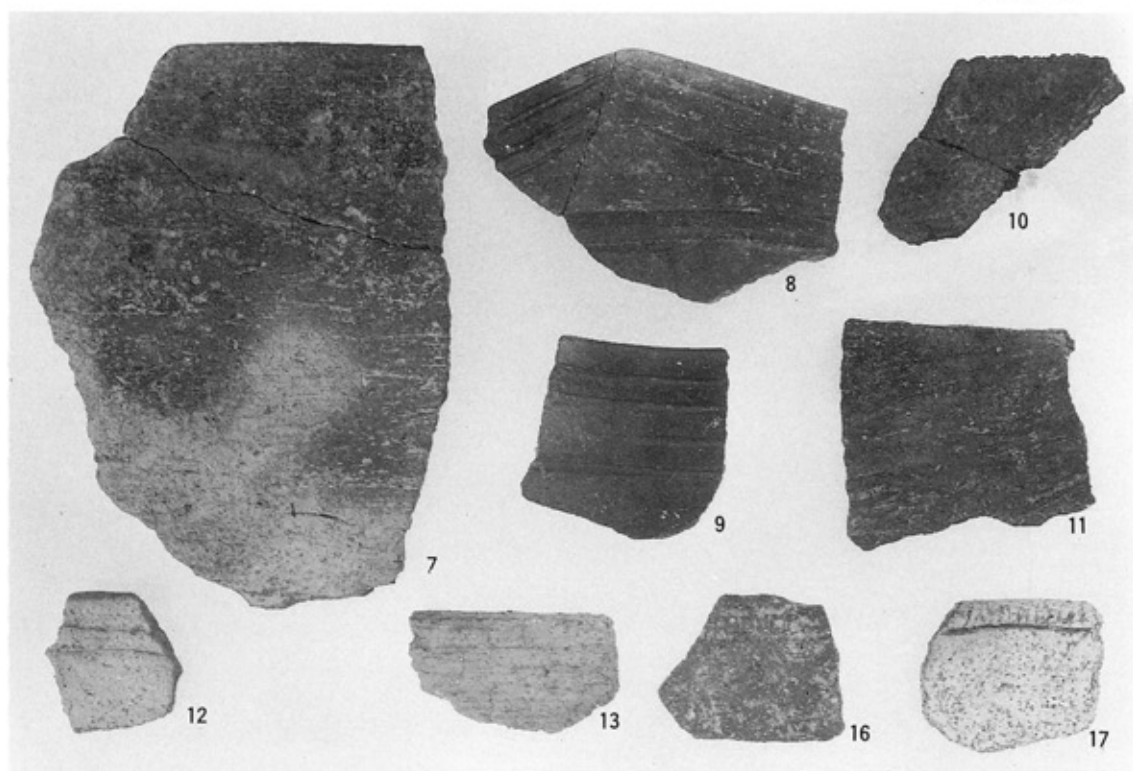
1. SD2(南から)

2. 同 南肩部

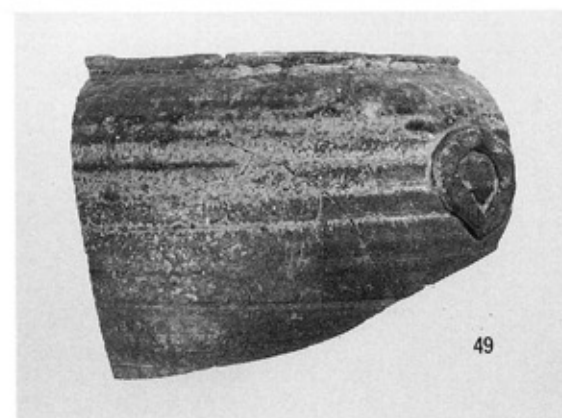
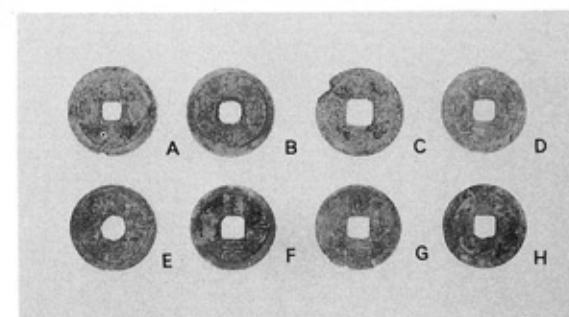
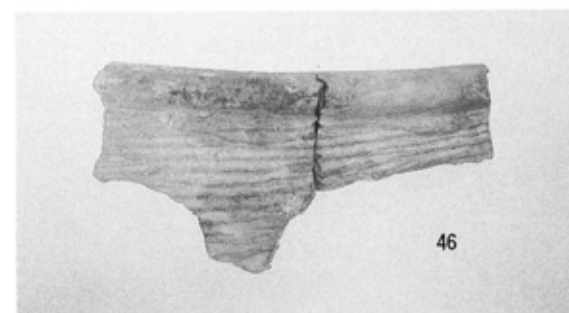
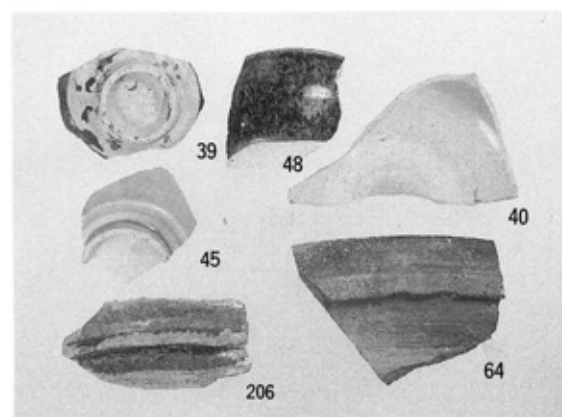
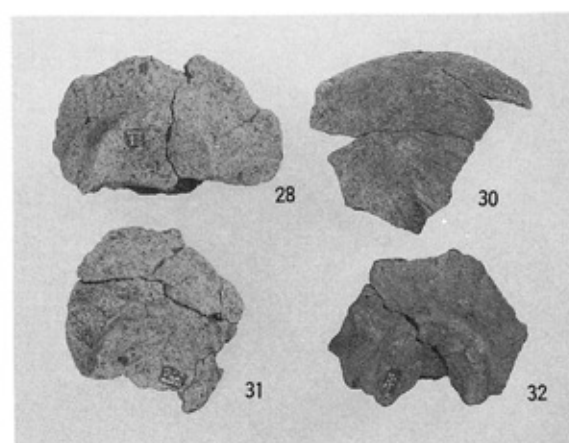
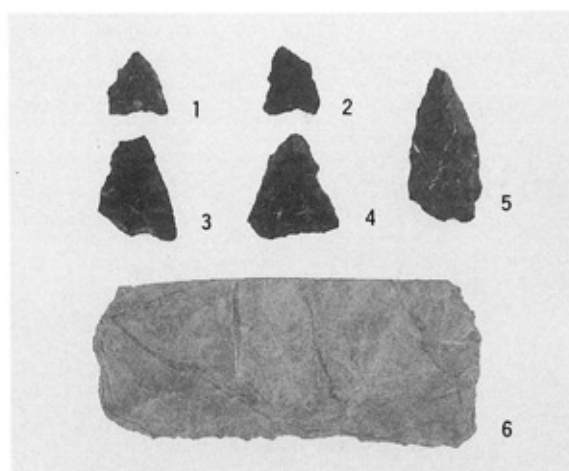
4. 掘立柱建物 (北から)

3. 同 中央部

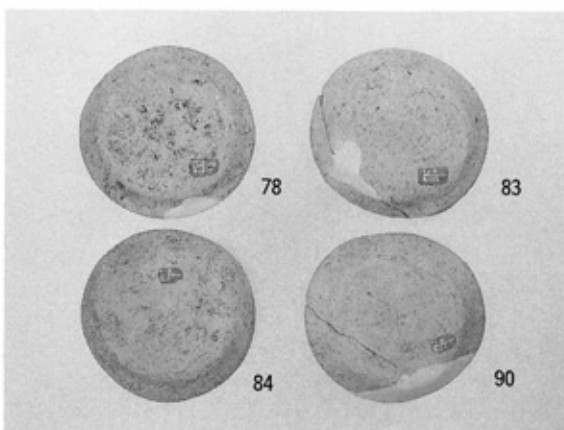
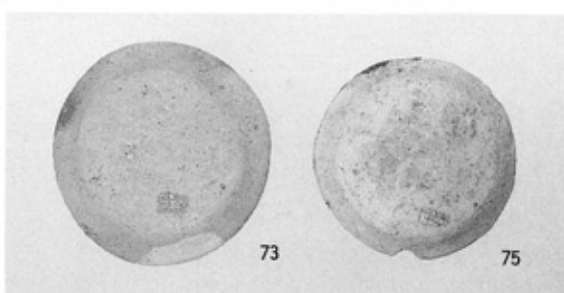
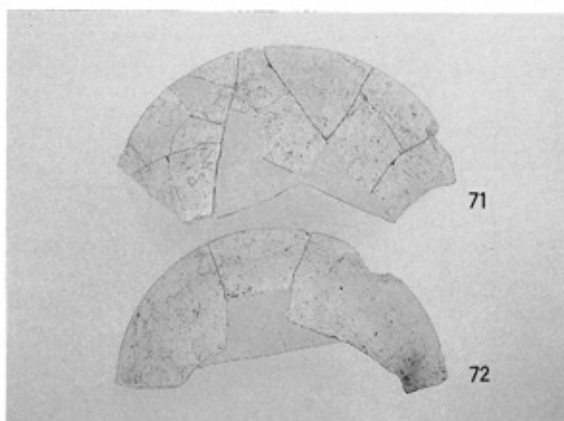
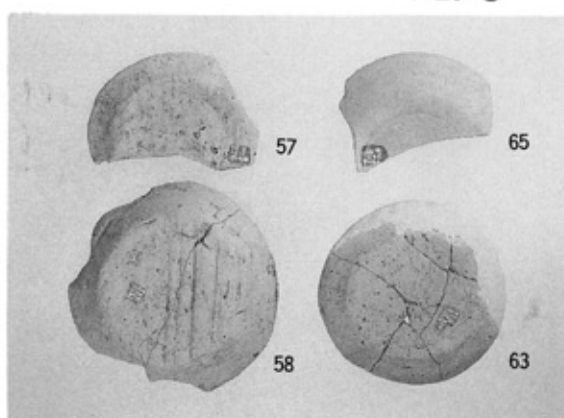
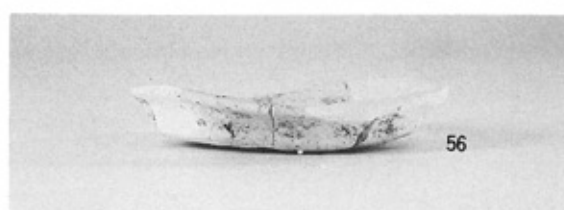
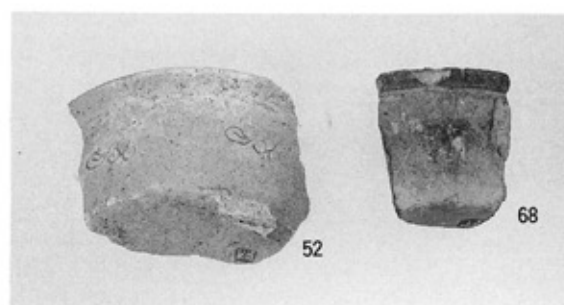
5. SK21・22 (南から)



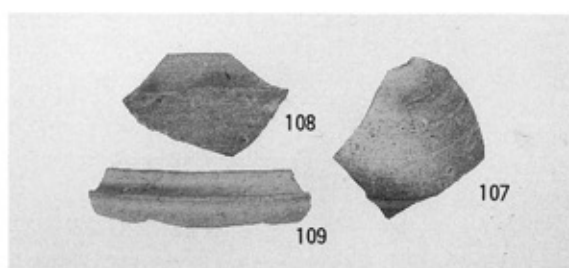
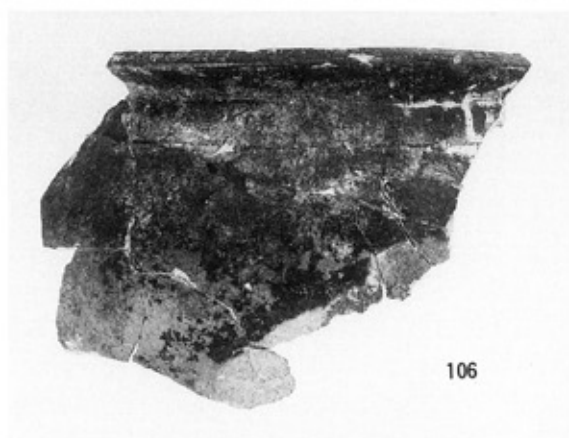
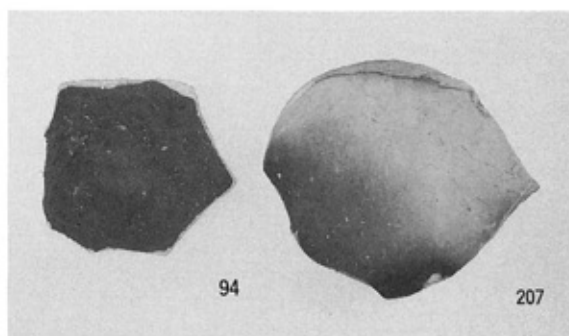
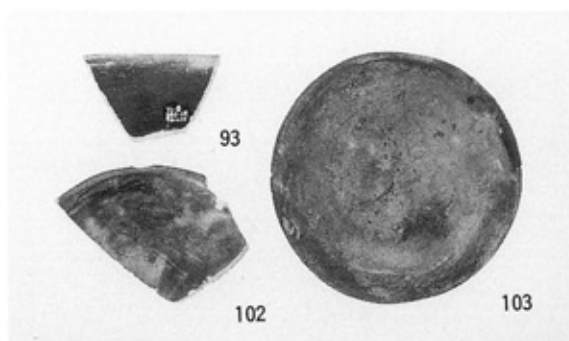
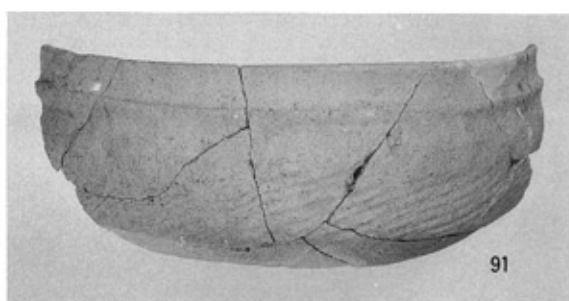
7-8-SK13, 9-12-SK12, 13-SK19, 16-P4, 17-SK17,
20-P3, 23-27·203-205-SD2, 201-P5



1-P2、4・28-SK12、32-SD2、37~40-SD1、49-SK5、
64-SK8、206-SK16、A~H-SK15



52-SK5, 55~58-SK4(1), 63-SK4(2), 71~73·75·78·83·84·90-SK10



91・92-SK10、93・94・102～109-SD2、110-SK23



95



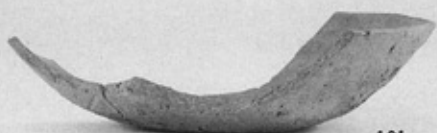
96



98



99



101



103

鳥居遺跡発掘調査概報

－ JR紀勢本線海南駅連続立体交差事業に伴う発掘調査－

1991年3月

編集 財団法人 和歌山県文化財センター
発行

印刷 邦 上 印 刷